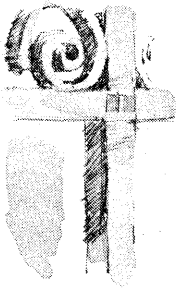
◇講演◇

昔話のユング的解釈・その四
―いばら姫―

河合隼雄



「いばら姫」の話の変遷

「いばら姫」というのはグリム童話の題でして、ペローの方では「眠りの森の王女」という題です。

この「いばら姫」というお話は（他のもそうですけど）グリムが話を収集して一八一二年ごろに一度本を出します。そしてその原稿を書いて、あと、グリムは何度も書き直します。そして、最後の一八五七年の原稿が今一般にでているわけです。ところが、一八一二年の原稿から一八五七年までだいぶ変わっているのです。例の「カエルの王様」も相当変えられています。その間にどういうふうに変えたかというと、ウィルヘルムは、話を上等にしたいわけですね。だから一八一二年の話に比べると、一八五七年の話の方がはるかに文学的になってきているわけです。ちょっと読んでみます。一八一二年のいばら姫の文章はこんなのです。

〈ある王様とおきさきの間には、一人も子どもができませんでした。ある日、おきさきが水を浴びていると、水の中から一ぴきのカニが陸にはい上がってきて「あなたは間もなく女の赤ちゃんをお生みになるでしょう。」と言いました。すると、果してその通りになりました。喜んだ王様は、盛大なお祝いを催しました。

国内には、仙女が十三人いたのですが、王様は金の皿を十二枚しかもちあわせていなかったので、十三人目の仙女は呼ぶことができませんでした。……〉

こんなふうな言い方です。それが一八五七年になるとだいぶ長くなります。

〈昔、王様とおきさきがいました。お二人は、毎日「ああなんとかして子どもがほしい」と言っていましたが〉
こんなのなかったですね、こういうのがでてくるわけです。そして……
〈いつまでたっても、子どもはできませんでした。
ところがある時、おきさきが水を浴びていますと、〉
この辺は同じですね。ところが、一ぴきのカエルになってるんです。どこでカニがカエルになったかわかりませんが、
〈一ぴきのカエルが陸へはい上がってきて、「あなた様の願いはかなえられるでございましょう」といいました。
カエルの言ったことがその通りになり、おきさきは女の子をお生みになりました。
姫君は、美しいお子さんでしたので、王様は喜ぶあまり、なすところを知らないありさまで、盛大な宴会をお開きになりました。王様は、親戚や友だちや知り合いの人々ばかりでなく、不思議な力を持っている仙女たちをもお客様としてお招きになりました。この女の人たちにも、姫をかわいがってもらいたいと思ったからです。
王様の国には、そういう仙女は十三人いたのですが、そういう人たちに食べていただく金の皿は十二枚しかなかったので、中の一人はお招きからもれることになりました。〉
ちょっと今、読みましたが、あとの方が文学的になってきてます。たとえば眠っているお姫様がおき上がるところなんか、
〈王子が城の中へ入ると、眠っている姫にキスをしました。
すると何もかも眠りからさめました。そして二人は結婚しました。
もし二人が死んでいなければ、まだ生きています。〉
これが一八一二年の方です。ついでに言いますと、「もし二人が死んでいなければ、まだ生きています」というのは、前に話しました一種の「わく」のための言葉と考えられます。
ところで、一八五七年になると、えらく文学的になります。たとえば、
〈いばら姫が眠っている小さい部屋のとびらを王子があけました。いばら姫はそこに横になっていましたが、あまり美しいので、王子は目をそらすことができず、身をかがめて姫にキスをしました。王子がキスをしてくちびるに触れたとたんに、いばら姫は目をさまし、眠りからさめ、いかにも親しそうに王子をみつめました。
そこで二人は一緒に塔をおりて行くと、王様もおきさきも、宮廷の人々もみんな目をさまし、あっけにとられたように互

いに顔を見合わせました。

すると前庭では馬がおき上がって体をゆさぶりました。猟犬が飛び上がってしっぽをふりました。〉

こんなの何もなかったのに、全部でている。

〈屋根の上のハトは翼の下から頭をだしてあたりを見まわし、野原の方へ飛んで行きました。カベにとまっていたハエははいだしました。台所では、火がゆらゆらともえ上がって食べものを煮ました。焼き肉は再びじゅうじゅうと音をたて始めました。料理番は、見習いの横つらをはりとばしたので、少年はわっと叫びました。女中は、ニワトリの毛をむしり終えました。

それから、王子といばら姫とのご婚礼が大そう立派にあげられ、お二人はこの世を終わるまで楽しくすごしました。〉

だいぶ変わっているでしょう。しかし、すじはなんとも変わっていない。つまり、文学的な潤色がほどこされているだけです。たとえば、「目がさめておわり」ではおもしろくないので、ハトがどうした、番人がどうしたということをずっと書いているわけですね。文学的にして、長くしているわけですけれど、われわれがメルヘンの解釈を考える場合はあんまり問題になりません。われわれは、すじ、骨の方を見ているわけですから。それがペローの方へいきますと、またずいぶん違います。おそらく二つの話が一つになったのだろうと思います。

さっき話が書き変えられたといいましたが、このことについては、たとえば、講談社の現代新書の「メルヘンの世界」(相沢博)にのっています。これは私の言うような心理学的解釈ではなくて、いろいろエピソードとかおもしろいことが一通りさっと書いてあります。一番初めに言いました、いばら姫やカエルの王様がどういうふうに書きかえられたかということは、「グリム兄弟」(高橋健二)にも少しのべてあります。

お話は皆さんよく知っておられると思いますので省略して、さっそく解釈をしてみることにしましょう。

これは、主人公はいばら姫、この女の人です。話の提示という点からいいますと、

〝王様とおきさきがいた。子どもがなかった〟ということは、この家では、新しい可能性というかあとつぎというか、そういうものがでてこなかったということで、人間の心にたとえると、私の心の中で王様は現代の自我、おきさきがいてある程度の国がおさまっているんだけれども、次にもう一つ新しく国が変わらねばならない。もう一つ新しい変革がおこらねばならないんだけれども、何を変革するのやら、何が変革されるのやら、

どういう可能性がでてくるかわからない時代、待っている時代です。

ここで王様が病気になって死ぬというのがよくあるテーマですけども、これは、そうじゃなくて、そこへお姫様が生まれてきますと教えてくれたのは、カニ、あるいはカエルだということです。

カエル

カニとカエル、どちらも共通する点は、水と陸と両方に両生する点です。これは心理的にいうと、無意識の世界の方は海で、意識の方が陸です。だから、水の中から陸へ上がってくるというのは、そういう意味で、無意識の世界から意識の世界へ入りこんでくる何かの可能性の意味をもっていまして、カエルというのは、よくでてくるわけです。

カエルというのは、無意識的な内容が変革して、可能性が意識化されうるというような時によくでてきます。逆にいいますと、カエルが予言するということは、その変革の可能性を人間としてはまだ知ってはいないわけです。

この王様の場合は、いかに自分らの王国がかわっていくか知らない。われわれの自我がどのように変化、変遷するかは私自身もはっきりわからない。その時に、無意識はよく知っていて、無意識の世界から、「あなたは変わる可能性がありますよ」と信号をだしてくる。その、信号をだす者としてもカエルがよくでてくる。可能性そのものとしてもでてくるし、それを告げる者としてもでてくるわけです。

あるいは、日本の神話をとりあげますと、少名毘古那命を知ってますか？　古事記にでてきます。大国主命が出雲の国を治めていますが、その時、小さい小さい神様が現われます。それが少名毘古那命です。その時に大国主命が、「一体あれは誰だ」ときくんですがわからない。そして、一番もの知りに聞こうと、カカシにききます。おもしろいですね。カカシが物知りだというのは。カカシは一本足でどこにも動けませんから、あちこち見てまわらない者こそ物知りだ、という一つのパラドックスですね。そういうパラドックスがありまして、カカシにきくのです。カカシが「あれを知っているやつはおれじゃなくて、あいつにききにいけ」と言ったのがカエルです。カエルの所にききに行ったら「あれは常世の国から来られた少名毘古那命である」という。これと同じですね。つまり、新しい可能性の発展を告げ知らす知恵をもったものとしてのカエルです。

だから、そういうテーマというのは、本当に世界共通です。

カエルというのはおもしろいものですね。ユングが言ってますが、カエルというのは手が人間的な手をしています。人間的でありながら絶対人間じゃないですからつまり、人間になる前の可能性ということです。そういう点で人間になる前の可能性として出現したカエルとして一番よく知られているのは、カエルの王様ですね。これはグリム童話の一番初めにのっている話です。

「カエルの王様」

王様と娘がいて、末娘がまりをころがすんです。そのまりが泉の中に入ってしまう。娘は「誰かあのまりをとってこないかしら、あのまりさえひろってくれたら何でもあげるのに」と言います。そしたらカエルがでてきて、「まりを返してあげるかわりに、私と結婚してほしい」というのです。

そしたら、どうせこんなカエルが来るわけないと思って「いいです」というわけです。そして約束したところが、ある日、ヒタヒタと音がしてカエルがやってくるわけです。そして娘はそれを見て、ギャーとびっくりして、あんなバカやろうと結婚なんかするものかと思ったところが、お父さんが「絶対にいけない。お前が約束したのなら必ずしなさい」という。これが父親の原理です。母親というのは「あんたそんな約束したの？いくら約束してもいいよ。カエルがいやなら殺しなさい」――これはお母さんです。うちの子さえよかったら……。お父さんの原理は「たとえお前が不幸になろうとも、約束したことは守りなさい」です。

日本では父親の原理が非常に弱いですね。母親の原理の方が強い。アメリカやスイスへ行ったら、本当に、父親の原理の強さを感じます。

この場合、「カエルの王様」の方は、カエルに会ったお姫様にはお母さんがいないでしょ。母性原理がなくて、非常にきびしい父親の原理によって、ついにカエルとの結婚を決意させられる。決意させられて自分の部屋にカエルをつれていくんだけど、娘はいやでいやでしょうがないわけです。いいかげんに逃げ出したらいいんですが、カエルはヒタヒタヒタヒタとやってきます。最後はあまり腹がたつのでカエルをひっつかまえて壁になげつけます。すると王子様になります。

つまり、逃げてばかりいてはだめで、最後のところは決然として勝負しなければならない。そして、その決然たる勝負というのは、いかに残酷であっても、やりぬかねばならない時があります。その決然たる勝負を残酷にやりぬくことによって成功

するという例は、前に話しかけてました「黄金のとり」の最後です。王子がキツネに「お礼はどうしたらいいか」というと、「お礼に自分をうち殺して、手足を切りとってくれ」というんです。そして、王子が「そんなむごいことは絶対にできない」となんべんもことわるのです。ところが最後にあんまり言うから、うち殺して手足を切ったら、そのキツネが王子様になるわけです。つまり美しいお姫様の兄さんです。

われわれが魔法をとく、あるいは一人の娘が男を獲得して結婚する、妻となりうるための決然たるものというのは、もう、お父さんの力をかりない。お父さんは命令を下すけれども、最後の力というのは、娘が必死になってカエルをたたきつぶすことです。そういう時に初めてここにあがないのテーマが表われます。血が流れなかったらあがなえないということがどうしてもあります。それでこそ、結婚ということが成就されます。

「カエルの王様」というのは、そうしたすさまじさすごさを非常にきれいにのべている話だと思います。そしてこの時に決然とやれなかったら、一生カエルと暮らさなきゃならないんです。いやだいやだ、なんでこんなことになったんだろう、と思いながら。実際こんなふうに思いながら、カエルと一生結婚している人もたくさんいます。

カエルを決然として壁にぶつける所というのは、昨日言いました炭焼き長者の娘が決然として離婚して炭焼五郎の所へおしかける、あそこですね。そういうのは、女性の中の父性原理です。女だって、生きようと思う時、男性性がなければだめなんです。いばら姫にもでてきます。男性だって女性性がなかったら人間じゃないし、女性だって男性性がなかったら人間じゃないわけです。ところが、いつどこで、いかにそれをたたきつけるか。あんまり早いことたたきつけたら、カエルが死ぬだけで、しまったと思う。そのタイミングがむずかしいわけです。

このあと、カエルの王様の方は、忠義なハインリッヒという話がついています。ハインリッヒというのは、実はカエルの王子様の家来で、王子がカエルになってから、悲しくて悲しくて、悲しむのをやめようとして心に鉄のタガをはめていたのです。ところがカエルは王子にかえるし、結婚してうれしいので、馬車のうしろにハインリッヒが乗っていたら、あんまりうれしいので鉄のタガがだんだんとれていくという話。

忠義な男、ハインリッヒというのは、また、童話お得意のテーマでして、そういうふうな男性像、つまり悲しむことをやめた男性、カエルになってた男性、カエルと結婚すると約束したのならやりぬけといった男、一人の女が妻になっていく間にい

ろいろ出会わなければならない男性像がうまく書かれています。

じかし実は、「カエルの王様」は、「忠義なハインリッヒ」の話と、「カエルの王様」の二つが一つになった話です。だからちょっとちぐはぐしてますが、それでも一つの物語としてみると、この三人の男性像がでてきていることは、おもしろいと思います。実際に、男が男であるためには心臓のまわりに鉄のわくをはめて、悲しむのをやめねばならない時ってあるんですね。そしてやっぱり、うれしい時には鉄のわくも落ちていく時もあるのです。そういう感じがよくでています。そして、娘が妻になっていく時の非常に強いインパクトを与えた父親像というのが非常にきれいにでています。

いつも思うんですが、「カエルの王様」というのは、誰の話なのかということです。つまり、カエルの王様の話か、娘の話か、どっちが主人公かなと思うんです。どちらが主人公かによって考え方がかわってきます。どうも、この話はどっちだかわからなくなるんですが、私は女性の物語だと思ってます。浦島と乙姫の話というのは、あれはあくまでも男性の見た女性の話ですね。女からみた女の話ではないと思います。いろんな女性像がでてきても、女性が見た、感じた女性像と、男性が感じた女性像とはだいぶ違うと思いますね。乙姫なんていうのは、男の心にうかんだ女性のイメージという感じが非常に強いと思います。ここで女性の観点から、乙姫のイメージを考えてみることもおもしろいかもしれません。みなさん興味があれば、女性としての立場から考えてみてください。

もちろん、いばら姫は絶対に女の人の話です。

ところで、カエルというのは、そう思って見るといろんな所にでてきていると思います。「カエル」という本を書こうかなと思うぐらい。箱庭療法(注)にでてきたカエルを全部うつすだけでも、非常におもしろいです。実際、童話の中のカエルのイメージというのをやってみたって、ずいぶんたくさんできます。私は今、日本の神話とか、グリムのメルヘンだけをとり上げているのですが、これがイギリスではどうだとか、フィンランドでは、ロシアでは、と見ていくと非常におもしろいです。

おとぎ話のプロモーター・トリックスター

ところで、そういうふうにカエルに言われてお姫様ができる。カエルの言った通りになって、おきさきは女の子を生む。その子がとても器量よしなもんだから、王様はうれしくてたまらなくなって、酒盛りを開いて、身内の者や友だちや知り合いばかりでなく、わざわざ仙女（あるいはみこ）までよんで、そして

何とかしようと思ったのはよくわかりますね、親の気持ちが。魔法によってでもうちの娘を大切にしたい。

こういうのを心理学的にいうと、過保護の状態である、といいます。過保護をするとろくなことはありません。実際、身うちや友だちぐらいだけをよんでいたらよかったのに、なんとか魔法の力を借りてでもうちの娘をよくしたい、と願ったばかりに……。十三人のうち十二人分しか金の皿がないので、ここに一人余り役がでてきて、これがおもしろい。ご存知のように、十三というのは西洋では不吉な数です。十二というのは完全な、全きものを表わす数としてでてきます。ところが、これがまた人生のパラドックスでして、完ぺきなものは完ぺきでないのです。完ぺきなものが、より完ぺきになるためにはよけいなものが一つつかなければならない。つまり、十二人使徒＋キリスト。あるいは、十二人＋ユダ。ユダがいないと、キリストの神話は完成しないわけです。

これは、おとぎ話の非常に好きなテーマです。ここで、実際のところ、十三番目の仙女がでてこなかったら、このお話は完成しないのです。この物語は確かにいばら姫というのが主人公です。けれども、このお話のプロモーターは誰ですか？　十三番目の悪い仙女です。そう考えますと、実際に世界を動かし、世界を完結するためには、非常に異質な一つの因子が必要であり、われわれはそれを無視することはできない。

このテーマはくり返しくり返し、いろんなところにでてきます。たとえばヘンゼルとグレーテルで、彼らをあの森へおいやった母親こそがあの話のプロモーターなのです。常に悪なるものというのが話の展開に必要である、という考え方です。そういう考え方が非常にきれいにでてくるのを、トリックスターといいます。トリックスターというのは、一応いたずら者とか訳されています。いたずら者という訳は感じがよくないので、トリックスターとそのまま言いますが。このトリックスターについて私の最近の著書『コンプレックス』（岩波新書）に説明しています。あるいは山口昌男『アフリカの神話的世界』という本に、アフリカの神話にでてくるトリックスターのことがくわしく書かれていますので、興味のある人は参考にしてください。

トリックスターというのは、いたずら者ですね。どんなことをするかというと、要するに、悪いこと、しなくてもいいことをするのです。しなくてもいい悪いことをする人です。それから、いわなくてもいい本当のことをいったりする傾向のある人です。みんなのグループの中にもトリックスターがいると思います。たとえばみんなのグループで、ある人が新しい服を着て

きたとします。そしたら絶対に似合っていないということがわかっていても、みんな「いいの着てきたんね」とか「よかったわね」とかいう中で、たった一人「なんにも似合ってないじゃないの」って言ったら、一ぺんにぱっと白けて、次に言いようがない。というのは、あんまり本当のこというからですね。だからせっかく新しい服は何と素晴しい、何といいわ、とわあわあいっている時に、その気分を一ぺんにつぶしてしまうのですね。これは悪です。しかし、悪といえば悪ですけれども悪じゃないです。というのは、見せかけの完成を破壊するのは悪とばかり言えないからです。トリックスターというのは強力な破壊性を持っています。だからトリックスターというのはきらわれます。腹がたってしょうがないですね。腹がたつけれど、言ったことは本当だし、やっぱりみんな心の中では、似合ってないと思うわけだし……。そういうのをトリックスターといいます。

トリックスターのいろいろ

これは、どこの国の神話にも登場します。日本神話でいうと、「須佐之男命」がトリックスターになります。トリックスターの中の、最大の素晴しいトリックスターです。あれは非常に位が高い方です。もっと単純なのはみんなの知っている「吉四六さん」とか「彦一」とか、ああいうのがトリックスターです。ずるいことしたり、うまいことだましたり、本当のこと言わなくてもいいのに言ってみたりやってるでしょ。それからドイツの「ティル・オイレンシュピーゲル」というのがあります。みんな知りませんか？　リヒャルト・シュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの陽気ないたずら」という素晴しい音楽がありますね。

たとえば社長さんが、浄瑠璃をうなって、社員をみんなよんだ時なんて、みんなへたなことなんか絶対わかっていても「社長はうまい」とか「たいしたもんや」とか言っている時に「なんや社長、みんな寝てましたよ」なんてこと言うやつがいたら、一ぺんにふん囲気がつぶれるでしょう。そういうふうなことを常にやっているやつです。そのふん囲気がつぶれた時に、この社長がえらい人だったらハッと気がつくはずです。「あ、おれはへたな浄瑠璃をきかせて喜んで、バカなことをした。だからもうおれは、浄瑠璃は楽しみにはやるけれども、社員をよんできくのを強制したりはしまい」というふうに考えたら、新しい秩序ができるわけです。そしてみんなは社長をますます尊敬します。

うまくいったら、この一人の真実を語るやつのおかげでこと

に新しい秩序が生まれていくわけです。へたにいったら「みんな半分以上寝てましたよ」っていったら、シュンとしちゃって、次は「君、すまんけど会社やめてくれ」やめろと言われないまでもだんだん左遷されるかもわからない。あるいは、ここでみんなものすごい気まずい思いをしすぎたために、それから浄瑠璃会はおもしろくなくなるし、社長と社員の関係は悪くなってくるし、ガタガタして、社運はかたむくかもしれない。だから、トリックスターというのは両刃の剣なのです。うまくいくともものすごく建設的にいくし、反対にいったら完ぺきな破壊なんです。そういう両刃の剣を持っていながら、自分は何をやっているのかはっきりわからないのをトリックスターという。それを本当にわかっていて新しい秩序を自らもたらして全部改革する人、これがヒーロー、英雄です。トリックスターがすでに英雄にまで高められている時というのは、やっていることの意味を知りつつ「よし、ここで思い切って言わなかったらたまらない。クビになってもいいから、一つ言ってみよう」というわけです。ただし口から出まかせにバーッといって「あ、しまった」なんていうのは、これはトリックスターです。そう思うと、このトリックスターとヒーローの間に、いろいろと段階があるのがわかるでしょ。どんなところにも必ずトリックスターはいるはずです。それがいなけりゃ、世の中おもしろくないのです。そう思いませんか。そして逆にいるとおもしろくない時もある。いると、よくつぶしにきますから。つまり、なかなかとらえようがないものなのです。

それで、トリックスターがいないとどうなるか、といったら、安定した平和が続くわけです。安定した平和が続くということは、何も変わらないということです。やっぱり変わろうと思ったら、トリックスターが出てこなきゃいけない。でてきた時にへたすると完全な滅亡におちいるし、上手にやったら改革が行なわれる。

そういうふうにいいますけれど、実際はみんな心の中にトリックスターがいるはずです。心の中にトリックスターが二～三人はいるはずです。時々それがチョロチョロと、もの言いたそうにする。思わず言って「しまった」と思う時もある。しまったことしたと思っていたら、かえってあとでうまいことといく場合だってあります。

カウンセリングとトリックスター

われわれ心理療法家というのは、トリックスター的働きをする場合がよくあります。なぜかというと、人のもっている人生

観を破壊しなかったら変わらないわけでしょう。だから、変わらないでいる人を変えるためには私たちは意識的に、あるいは無意識的にトリックスターになることがあります。たとえば、こういう経験をしました。自分でもおかしくてたまらなかったのですけれど、それは意識的でなく、まったく無意識的にトリックスターに私がなってたわけです。

学校恐怖症の人がやってきまして、その人は大学生にはまだなれません。高校生ですが、三年ほど学校へ行ってなかったので、本当はもう大学生の年齢です。その学校へ行ってなかった子が私のところを訪ねてきたのですが、来る時がものすごく正確なんです。十時と約束したら、十時がなったら戸がさっと開くのです。本当に正確です。そんなふうにあんまり正確に来るから「あなた、ものすごく正確ですね」と言ったら、自分はもう、遅刻するのは大きらいで、人間が人間と約束をしてこれを破るというのは一番いけないことだ。だから自分は十時と約束したら、十時十分前に必ずそこへ到着しています。そしてそのまわりをぐるぐる歩いているんです。そして十時という時にパッと入るわけです。すごい人でしょ。だからそれをきいた時に私は思わず「あんたってすごいんですね。それだったら今までに、遅刻、欠席全然ないんでしょう」といいました。その人もつられて「私、遅刻も欠席も……」といいかけてはっと気がついて「欠席ばかりしてました」つまり、学校恐怖症だから休んでばかりいたのです。その人の欠点にズバリとふれるような言ってはならない真実を私は思わず言って、その時の私というのは、無意識のうちにトリックスターにならされていたわけです。

ほんとに、この場合なんかは非常に成功します。なぜ成功したかというと、私が「遅刻、欠席全然なし」と言ったらその人も思わずつられますからねえ。「はあ、私はもう遅刻欠席はええ……で私は……よく休んでます」三年間休んだわけです。で、私がその時言ったのはあなたほど遅刻しない人はめずらしい。しかし遅刻をしたり、約束を破ったりしている人は今、大学生になっているのに、遅刻を一ぺんもしていないあなたは、高校三年生にとどまっているというのは、非常におもしろいと思いませんか？

これをどういうことかと言ったら、あなたのそのようなものすごい正確度ということは、あなたの進歩を止めているんではないか。つまり、この正確さをこわさねばならないということです。これは一つの破壊ですね。破壊せよ、ということを非常にきれいに言えたわけです。ここでこのようなやりとりがなく、単に「あなたはあんまりがっちりしすぎてますから、もう少し

ルーズになった方がよろしいでしょう。」などと忠告したってだめです。やっぱり、こういう思わず出てきたことでバチンとあたってこそきれいに通じるわけですね。実際カウンセリングをしていて思いますけれど、このようなことはなかなか意図的にはできません。そんなうまいことというのは、意図的にはできません。こんな点はスポーツによく似ています。思わずパーッとやったらゴールにさっと入った、なんてことよくありますね。その時は思わず入ったからまぐれ、ではなくて、やっぱり練習を重ねた人ほど、思わずやったことがみんな法にかなうでしょう。あれと同じことで、カウンセリングの場合、思わず言ったことが法にかなっていて、あとでわれながらうまくいったな、と思うことがよくあります。そういうのは、あとでうれしくてしょうがないです。それで、誰が、私がうまかったのか、私の心の中のトリックスターがうまかったのかわかりませんけれど、そういう点でカウンセリングというのは非常にトリックスター的要素が必要です。

「いばら姫」に見るお国ぶり

さて、話をもとにもどしますと、非常に美しい王女様が生まれて、王様もお姫様を待ちうけていて……。そうですね。待ちうけていて出てきた女の子。みんなが喜び、仙女までが喜んで、一番めにみさお、次には宝をさずけます。ところでそれだけ完べきな女というのは幸福になるはずがないのです。幸福になるためには、十三番目のものがいるのです。ここでトリックスターが、この女性の幸福のために一石を投じるわけです。

ところでおもしろいことに、ペローの話ではもらう物が違うのです。グリムの方では、正しいみさおと、よい器量と、お宝をというようになってますけれど、みなさんだったらどれが一番ほしいですか？　何をもらったかというところでは、わりあい、文化圏とか、そこの社会とか、時代とかを反映していると思います。おそらく今だったら、一番初めに正しいみさおをくれたりしないと思います。ペローの方では一番初めにもらったものは、「王女様は世界中で一番美しい方になるでしょう」で、ここで美貌を一番にもらっています。フランスらしいですね。フランスとドイツは全然違います。ドイツの方はみさおをもらうし、こっちは美貌が一番だし、二番目は「天使のように賢い方になるでしょう」賢さというのを贈るわけです。三番目は「何をなさるにも大変しとやかになさるでしょう」四番目は「とても上手にダンスをすることができるでしょう」。おもしろいですね。ダンスということが、どれだけ大事な教養であった

かというのがよくわかります。ダンスができなかったら絶対にデビューすることができません。

前にもたしか話しましたけれど、女の人というのはある年齢に達した時に、社交界にデビューするわけです。それまでは子どもなんです。それまでは子ども扱いで、子どもとして勝手なことをしていてもいいんです。社交界に出る時の一番初めは舞踏会です。そしてその時に踊ることによって、これから結婚する可能性のある娘として現われた、ということになります。だからダンスが非常に大事になってくるわけです。今でもそういう風習はまだ残っているのじゃないでしょうか。それから五番目の仙女は「うぐいすのように美しい声で歌を唄うでしょう」六番目の仙女は「王女様は、どんな楽器でもこの上なく上手にひけるでしょう」といいました。

そういうふうになっていてペローの方では仙女の数も八人になっています。これは、いばら姫の方は十三人。非常に感じがよくあらわれてますね。ペローの方は七プラス一の八人。これは実は八というのも意味がありまして、ある意味で完全さを表わすものとしてよくでてきます。四というのが一つの完全なものです。ところが七というのは、これはユダヤ教では七という一つの完全数と考えていいのです。国ぶりによって違うのです。だから、ある種の完全数に対して、また一つの完全数ができるという考え方が入ってくるだろうと私は思います。もっともこれはそこまではっきりとは断定できないようです。

贈り物は、ペローの方の贈り物と、いばら姫の贈り物とは違います。だから初めに言いましたように、おとぎ話の研究というのは、いろんな研究ができる。何も心理学的なことばかりじゃない。こういうところを調べることによって、フランスやドイツのそのころの風俗の相違とか、国民性の違いとか、そんなことがずい分わかるでしょう。いばら姫のバリエーションを探していって、イギリスだったら第一の贈り物は何だったろう、とか、そんなことを考えていくのも非常におもしろい研究の仕方だと思います。私はもちろん心理的なことばかり考えていますから、あまりそういうのには興味をもちませんが、おとぎ話というものは、いろんな側面から研究できる、ということがわかると思います。初めにいろいろ言いましたけれど、やっぱり自然現象との類比という考え方だってできたってかまわないと思います。いろいろな考え方でいいのです。

死・運命

ところで、トリックスターの十三番目が入ることによって、

話が展開しますけれども、そこで言ったのは、「十五歳の時に、つむにささってくたばるぞ」と言うのですね。これはどういうことかというと、これは「死」です。死ぬということです。ところで、死イコール悪と思う人は多いと思います。われわれにとって悪とは何かというのは非常に問題ですけれども、死の神というのは悪だという考える人はずい分いると思います。

しかし、人間が生きていくためには、美貌であるとか、お金であるとか、みさおであるとかが必要ですが、それに死ということが加わらなかったら完全ではないのですね。死ということがなかったら、生ということの意味がなくなってしまう、生を生たらしめるために、やっぱり死ということがいるのです、といっても、十五歳でくたばるのは早すぎます。これは困ります。

ところで、十五歳というのはどんな年齢でしょうか。これは日本であれば、男子が元服してた年ですけれど、結局、今まで子どもだったのが一人前の娘になる年です。いってみれば、十五歳というのは悪ということがわかるようになる年といっていいかもしれません。これがわからなかったら大人になれないわけです。

悪い仙女は王女が十五歳の時に刺されて死ぬといいますが、実は、まだ十二番目の仙女が残っておりまして、これがさっきもいいましたがバレーの場合は、たしかライラックの精だったと思います。それが「のろいをとりのけるわけにはいかないけれども、力を弱めることはできる」といいます。これが非常におもしろいところで、十五歳で死ぬという運命を授けられた場合には、その運命を全く変えるわけにはいかないが、これを弱めることができるというのです。これもひとつの真理だと思います。たしか、前にもそういうことを言ったと思いますが、人間に実際、運命というものがあるのだろうか、ということになります。みんなはどう思うか知りませんが、若い時というのは運命なんかはないと思いたいでしょうが、私のように年よりになりますと運命があるような気がします。ただし、運命というものがあるといっても「生まれた時からあなたは、プロ野球の選手になる運命がある」とか「腸チフスになって死ぬ運命がある」とか、「交通事故にあう運命にある」とか、そんなふうには、決まってないように私は思います。わかりませんよ、それも実際考えたら、そうと思わざるを得ないときもありますからね。悪いことをしているやつが平気で生きてるのに、一番よいことをしている人がどうして交通事故にあって死なねばならないのか。つまり、それは運命だった。そう言うとかたがつくわけで、それを運命以外のことで説明しようと思っても、なかなか答の

出しようがないわけです。

運命というテーマも、昔話の好きなテーマでして、それは昨日読んだのにもありましたね。塩一升の位と竹一本の位と生まれた時からきまっている。塩一升の位で生まれた子は塩一升であるし、竹一本に生まれた子は竹一本である。どうも、その程度のことは決まっているのかもしれません。竹一本の位に生まれた人間というのはどうしたらいいかというと、竹一本の位に生まれているのに塩一升の位の娘と結婚したりするから駄目なんです。でこの人は、あの竹細工でもして生きていたら本当に一生幸福だったろうと思います。実際に私は思うのですが、百万長者になるということと、竹細工をして一生を生きることと、どっちが幸福かわかりません。私はたくさんの人に会いますので、人間の幸福ということについてつくづく考えさせられるのです。みんなが普通に考えるように、お金があるからといって幸福だとはかぎらない。ただしお金があった方がよいとはいつも思っていますけれど。といって、別にたくさんあるからよいとは簡単にいえません。

たとえば、すごい遺産をもらって、うつ病になった人がいます。結局、遺産をたくさんもらうでしょう。すると、みんなが悪口を言うわけです。「あいつは力もないのに遺産をもらったおかげでえらそうにしている」とか、「あいつは何にもしてない。ただ単に遺産をもらって遺産のお守りをしてるだけじゃないか」とか言われるわけです。そしたらものすごく腹がたってくる、といって無茶苦茶して遺産をつぶしたら、どんなことをまた言われるかわからない。そう思うとうつうつして心因性の抑うつ症になってしまった人があります。その人の話を聞くと、一番の原因は何かというと非常に大きい遺産をもらったことです。だからわたくしは、その人の診断は「遺産過多症」だと言ってたのです。(笑い) 実際に遺産過多というのは大変なことです。

こういうふうに考えると、人生というものは本当に何が幸福かわからないです。ほんとに何が幸福か、そう思うと人間に与えられた運命などというものは、幸福な運命とか不幸な運命ということは無いのではないかとさえ思います。運命そのものは幸福でも不幸でも何でもなくって、何か言葉でも絵でも表わせないようなものと思います。そして、幸福とか不幸とかは、われわれの受け取り方によって生じるように思います。

カウンセラーとクライエント

私はカウンセリングをしていてよく思うのですが、結局クライエントというのは自分で直っていくわけです。自分で直って

いくということはカウンセラーは何もせずにいるということに意味があるのです。これは私がたとえによく言うのですが、カウンセラーというと指揮者みたいなもので自分は音をならさないけれども、クライエントの演奏を指揮して、そうしてオーケストラにする。そういう感じに似たところがあります。そういうふうに考えますと、演奏する楽譜を一体誰が書くのかという疑問がおこります。カウンセラーが指揮者でクライエントが演奏家とすると、一体誰が楽譜を書くのか。ここで私は、楽譜は「運命」が書いている、そうしてわれわれは生まれた時から楽譜をもらっていると考えてみる。あなたは、これをやりなさいと。その時に同じ「運命」でもＮＨＫ交響楽団が演奏したら、みんなお金を払って聞きにくるけれども、京都大学の交響楽団の演奏ではそれほどは聞きにこないですね。でもみんな同じ「運命」です。みんなダダダダーンってやるのですけれどもやっぱり違う。同じ楽譜を与えられても演奏の仕方で違ってくる。たとえば、ベートーベンの運命とフォスターの草競馬でしたら、それは運命の方が素晴らしいというけれど、下手なオーケストラが運命を演奏したってみんな聞きにこない。けれども、すごい歌手がフォスターの歌をうたったらみんな聞きにきます。そしたらどっちがどっちと簡単には言えない。というようなことを言ってたのです。

それでも、楽譜が全部書いてあるというのはあんまりひどすぎるので、このごろちょっと考えを改めまして、楽譜は全部書いてないけれども、われわれの運命というのは動機みたいなもので、われわれ生まれた時に動機をもらうわけです。たとえば、・・・—とこういうふうな動機をもらうわけです。またあるいは、—・—というような動機の人もある。そういうのをもらうけれども、その動機をもとにしてどんなメロディーを歌い上げるかということがわれわれの人生であると思います。同じ動機をもらってもベートーベンだったらダダダダーンとやるからみんな聞きにくるけれど、われわれがやると駄目なわけです。同じ動機でも全然違うものができますから。実際に運命交響楽を聞くとあの動機が何遍も何遍もくり返されていることがわかります。だからすごい天才などというのは、ふとある日ひとつの動機が心に浮かぶのだと思います。そして、その動機をもとにしてきれいなメロディーができあがっていくし、いくらでも展開していくわけです。ところで、私たちはたとえばダダダダーンというような動機をもらったとしても、タタタターと走って電車に衝突して死ぬかもわからない。これもひとつの動機です。だから私はそういうふうな程度の運命が、字にも絵にも書けな

いけれどもあるように思います。

しかしそれにどのような旋律をつけ、どう演奏するかということが私たちの人生であるし、そして、なろうことなら折角与えられた動機であるならば、あたう限りのバリエーションを歌いあげたいと思います。これを何と言いますか？　自己実現と言うのです。その可能な限りの変奏曲を歌いあげて、そして可能な限り美しく歌って死んでいきたいというのが自己実現だといっていいと思います。

「生まれ子の運」

ところで「運命」ということをとりあつかった、おもしろい日本の昔話があります。それは「生まれ子の運」といって、この前読みました「炭焼き長者の話」とよく似たところがあります。「昔、男がありました。女房が身もちになったので丹波おいの坂の、子やす地蔵に願をかけました。男が地蔵の堂で通夜をしていると、よその地蔵さんが来て『他にお産があるのでお前行ってくれ』とさそいましたが、子やす地蔵は『客があって行けない、お前行ってくれ』とことわっていました。そして明け方によその地蔵は帰って来ました。『ごくろう』と子やす地蔵が言うとその地蔵は『寿命は十八の寿命に決めてきました。その時に京の桂川の主にとられることになる』『ごくろう』ということで、もう決まっているわけです。だからこの人は自分の息子が十八歳で桂川でおぼれて死ぬということを聞いてしまうわけです。

それからどうなったかというと「その男は京の桂川のせぶりを請けとる役人になり、子どもは大変親孝行でした。そして十八歳の時に桂川が大水になりますと、子どもがお父さんに『お前の代りにせぶりに行く』と言いますがお父さんは『十八歳で桂川で死ぬ』と知っているから『絶対に行ってはいかん』と言って止めるわけです。」このお父さんが『絶対に行ってはいけない』と止めるところは「いばら姫」の話でいうと「王様は、その国中のつむを全部燃やしてしまいました」というところですね。それが人間の知恵というものです。人間としてできる限りの事をしたいと思いますけれど、そんなことは運命の力よりは、はるかに弱いのです。この場合でも、折角そう言っているのに結局、親の目をしのんで、子どもは出ていってしまいます。それからが日本的なのですが、お父さんはどうしたと思いますか。『親戚に来てもらって葬式のこしらえをせよ』というと女房が『あほなこと言うな』といって怒ります。しかし何やかやと言って葬式の用意をするのですね。ところで十八歳の男の子は朝

飯も食わずに出て行って腹が減ったので餅屋へ行きます。するとかたわらに立派な娘が腰かけています。『ねえさんまあ食べんか』と言うと『わしも食べさせてもらおう』と言って、その娘さんは食うわ食うわ無茶苦茶に食う。そして百貫からの餅を食ってしまいました。(笑い)百貫てどれだけか、大分すごいと思います。そこで店の主人が『払うてくれ』と言うと息子が『おれはぜに一文も持たぬ。しかしそのまた後に来るけれどもお前の家に印として編み笠をかけておいてくれ。わしが、もしも死んだらこらえてくれ』と言って出かけます。

その後、娘と連れだって桂川の土手に行きます。そしたら娘が『わしは、ここの主だ』というのです。そして『お前は十八歳の寿命でここで死ぬはずだったけれど、わしにあんまり餅を食わしてくれたので六十一歳まで延ばしてやる』で息子は、『やれやれえらい事になった』と言って、(笑い)つまり金を払わないといけませんから、それで帰りに餅屋へ寄って『実はこういう事で六十一歳まで寿命を延ばされてしもた。死ぬはずだったのに死ねんようになった』と言うと餅屋が『それはたいした話で、助かったとならば百貫ぐらいかまわない』とこらえてくれた。家に帰ると葬式ごしらえをしていた親が大いに喜びました、という話。

こういう運命に対する感じとり方なんか(笑い)非常に日本的な味があると思います。何かこうえらく頑張ってみせたけれども、行ってしまったら、もう葬式だと思ってるし、それから息子の方は娘に餅を食うだけ食わすというようなところ、何かあるものをそのまま受けとめているようなところ、運命をまるっきり享受して、まあ餅食うなら食えというふうになってくると、また運命の方が道を開いてくれるのですねえ。六十一歳まで延ばしてくれる。これは非常に日本的な話だと思います。こういうふうに運命がありながら、何かのことで変わっていく話も、昔話のお得意の話です。こういう話を聞いてすぐ思うのは、われわれはカウンセラーとして運命を変えることはできないけれども、何とかして弱めることぐらいしてあげたいという事です。実際そう思っています。

人間でない知恵

ここで話を「いばら姫」の方にもどしますと、「のろいをとりのける事はできないけれども弱める事ができるという仙女があって、お姫様は死ぬのじゃなくて百年間眠るのだ」と言います。この死ぬということと眠りということは、非常に親近感があるものですね。ギリシャ神話でも眠りの神ヒュプースは、死の神

タナトスと兄弟です。あるいは死のことを永眠といいますね。「目ざめない眠りについた」という言い方もします。そういう考え方をするとわれわれが眠るということは、生きかえる死を経験しているのかもわかりません。毎日毎日、死ぬと思うとこれ非常に楽しくなります。というのは、「明日私はどう生まれかわろうか」ということになるわけですから。そう思って一晩死ぬという事は楽しいことです。そうして死んだ間にわれわれは地下の世界へ行って地下の世界をみる、それが夢だと思います。

ところで王様は「国中のつむを残らず焼いてしまえ」とおふれを出しました。これが人間の知恵で、こういうふうな人間の知恵というのは絶対運命に対して力を持ちません。人間として、できるだけの事はしても、そういうことというのは運命の力を変えることはできません。たとえば学校恐怖症の子です。学校恐怖症の子が学校へ行かない。そうするとこの子を学校へ行かすためにといろんな事を考えますね。友だちが誘いに行ったらどうだろうとか、タクシーに乗せて連れて行ったらどうだろうとかいうのは、人間として全部考えられますけれども、全部失敗に終ります。だからそんな人間の知恵でない知恵を使わないと学校恐怖症の子は学校へ行かないのです。

人間ではない知恵とはどんなことですか。その学校恐怖症の子にぼくらが会って「行ってもいいし、行かんでもいいよ」と言うんです。行かそうとしなくするわけです。そしたら、その子は行くようになるのです。だからその辺は非常におもしろいです。しかしここではもちろん王様も人間ですから最も人間的な考え方で「つむを残らず焼いてしまえ」と言います。これも親として当り前のことです。だから学校恐怖症の子に親が「行け」と言って説教したり、「タクシーに乗れ」と言ったとしてもそれは親として当り前のことです。しかし親として最善の力を尽くそうと、子どもは悪くなる時は悪くなります。そこまで運命が結晶してくれば。だから結晶する前から頑張っていれば別ですが、ある点までいってしまったらもうなかなか変わるものではありません。

ところで、この姫はだんだんと成長して「本当に素晴らしい女の子になって、一目見た人は誰でも好きにならずにはいられなかった」と書いてあります。それほど素晴らしい人というのは影がなさすぎるのです。誰からも好かれる人にろくな人はいません。(笑い)本当にたいしたことをしようと思ったら、ちょっとぐらいきらわれないと。たくさんきらわれると困りますが。やはり十二人いたら一人きらわれるぐらいだと丁度いい。十二人の人にすべて好かれるということは、キリストにもできなか

ったわけですから。われわれが本当に自分の人生を生きるということは、一目見た人は誰も好きになるというふうにはなれないのじゃないかと思うのです。そういう人は十五歳で死ぬよりしょうがないのではないでしょうか。

十五歳

ところで、十五歳になった時に王様とおきさき様は留守にします。これ残念ですね。ものすごく大事な時こそいてほしいのにと思うでしょう。ところが世の中というものは、本当にそうなるのです。この十五年間必死になって、つむは全部燃やせというほど頑張った王様とおきさきは「あんまり気疲れだから一辺二人で旅行に行こうかしら」ということで行くことになってしまう。人間というのは実際そうなのです。努力をしすぎると、どこか肝心の時に抜けてしまうのです。

そこでお姫様は「一人ぼっちで留守番をしていました」つまり前にも強調したように、孤独な状態になります。人間が孤独になった時には非常におもしろいことが起こります。ここでまた、全然違う言い方をしますと、十五歳の少女にして初めて孤独を知るのだともいえます。これを象徴的に考えると、別にお父さんとお母さんがどこかへ旅行に行ったなどといわなくても、一緒におったとしても、姫は孤独を感じたのだと考えてもよいでしょう。孤独になった時、つまりわれわれがとうとう自分の無意識の世界と対決する時がくるわけです。それまではお父さんの言うままに、お母さんの言うままに生きてきたのですけれども、とうとう心の中の何かと対決しなければならない年がやってきます。それが十五という年です。みんな自分のことを振り返ってみてどうですか？　十二歳ぐらいでしたか？　これは人によって少し違います。早く訪れる人と、遅く訪れる人があります。そして別に早い人が偉くて、遅い人が悪いということは決してありません。これは非常に不思議な事です。しかし、あまりずれたのは困ります。第一反抗期を大学になってから迎えたなどという人は非常に困ります。あるいは第二反抗期を四十歳になって迎えた人とか、こういう人は困りますけれども、少しのずれというのはあまりたいした事はありません。しかし平均的に言うと十五歳ということになるでしょう。

一人ぼっちで留守番をしていますと、やはり何かしたくなりますね。みんなだってそうじゃないですか。家で一人で留守番させられたら開けてはいけないような引出しをちょっと開けてみたり。そしてお父さんの恋文が出てきて、なるほどこんなものかと思って、そこでみんなは大人になっていくわけです。だ

からこのお姫様も一人ぼっちになったので、お城の中を歩き回ります。そしておしまいに古い塔のところへ来て、この塔の幅の狭い段をぐるぐる登って上の方まで行きます。この塔の中におばあさんがいるわけですね。麻を紡いでいるおばあさん。これは十五歳ぐらいになって体験する事というのが非常に良く表わされていると思います。今までは両親の言う通り女の子として生きてきたけれど、このへんでお父さんからちょっと離れ、お母さんからちょっと離れて何か探検をしたくなる。みんなもそのころ少し探検したのではないかと思います。そのころしてない人は今ごろやっていると思います。そうして探検をすると必ず恐いやつがいます。ここでは、つむを持ったおばあさんがいて一生懸命に麻を紡いでいた。このおばあさんは悪の化身であり、運命の女神でもあり、そして狂言回しです。これがおるおかげで娘は成長していくのです。あるいは、これがあるおかげで娘は危険にあうのです。しかし危険にあわずに成長するなんてことは、本当に考えられないことです。

娘の好奇心

そしてここでも娘の好奇心というテーマがちゃんと入っています。娘の好奇心といっても、先日話したようにトルーデばあさんのところへ行った娘はあっさりとやられるわけですが、いばら姫はどうでしょう。「今日はおばあちゃん、何してるの」とか言っているうちに「おもしろそうだからやってみようか」。これ絶対好奇心ですね。しなくてもよい事をするとパーンとはねて倒れてしまいます。ここでこの姫は倒れるけれども、死にはしなくて百年の眠りにつきます。ところが、あのトルーデばあさんのところへ行った娘は、丸木に変えられて、くべられて、終りなんです。この両者の違いはどこにあるかというと、いばら姫の場合は必死になって守ってくれる両親の保護のもとに行なわれているわけです。ここにパラドックスがあって、親に守られているという事は非常にいい事なのです。親に守られていながら冒険する。守られている者こそ、一番良い時に冒険する事ができるのです。下手な人ほど冒険する力がないのに、ふらふら出ていってトルーデばあさんに会うとか、あるいは大久保清に会うとか、そういうことになるのです。さて、いばら姫の場合、娘の好奇心はある意味では失敗でしたけれども、むしろこれぐらいの失敗はどうしても必要なのだとも言えます。

そこでこの姫がつきさされる。ここで姫をついた、つむのひと突きというのは何かという問題が生じてきます。これもいろいろ考えられますけれど、内的な意味と外的な意味と両方ある

と思います。われわれの世界の、われわれの経験は内界と外界とでものすごくきれいに呼応しているものです。だから今の場合でも、この姫をひと突き突いたというのは外的に言いますと、何か男性におびやかされたような経験といえます。十五歳ごろになって初めて男の人にからかわれたとか、あるいは十五歳になって初めて男の人が好きになりかかったとか、かばんを開けたら男の子からの手紙が入っていて驚いたとかいうことです。実際、みんなそういう経験があったと思います。中学校の二年生ごろに何とも思っていなかったのに、かばんから手紙が出てきた時の気持ちは何ともいえませんね。「まあ、いやらしい」というのと「まあ、うれしい」というのと、ウワーッと入り交ってね。ぼくは想像するだけでわかりませんし、間違ってたら訂正してください。この時「これは、お母さんには見せられない」と思って見せない人があるのですね。それから見せる人もあります。そういうふうに、これだけはなぜか知らないけれどお母さんに見せられないという人はどうなんですか？　そこで初めて秘密ということを持つわけです。この〝秘密〟を持つということは大人に至る第一段階ですね。今日は秘密についての考察はしませんけれども、考えてみるとおもしろいです。この「秘密の現象学」という本当にする価値のあることです。

アニムス

さて、ひと突きされたという事は、今言ったように考えてもよいしあるいは、もっと生理的に考えるならば、ここで初めてメーンストレーションを体験したという考え方をしてもよいかもしれません。「娘になった」という体験です。そういう体験をしたと考えられます。あるいは、もっと心理的に考えれば、今までしばしば言っているようにすべての女性の心の奥深く住んでいる男性性、それが心の表層にパッと表われてきたといっていいかもしれません。つまりこれは内的な体験です。それをユングは「アニムス」とよんでいます。すべての女性の心にはアニムスというのが存在する。女性の心の中の男性がアニムスです。つまり内界でのアニムスの動きと外界からの男性の働きかけが呼応するのです。すべての女の人はなぜか知りませんが今の社会では一応、いわゆる女らしく生きることを要請されています。たとえば女の人であればおしとやかにしなければならないとか。

さっきの贈物をみても第一の仙女はお姫さまに腕っぷしの力強さを与えました（笑い）とか、二番目の仙女は数学の才能を与えました。そんなの書いてないでしょ。みんないわゆる、女

とはこういうものだと思われているものを一応与えられています。だから十二人の仙女がいろんな事を与えているのに、力が強いことはすばらしい、数学が解けることもすばらしい、野球でホームランを打つのもすばらしいと思いますが、そういうことを誰も与えていないということは、人間の心の可能性がものすごくたくさんある中で、女であるならばこの十二条をお守りください、あとは結構ですというわけでそれ以外はもらっていない。もらってなくても心の中に可能性としてはあるはずです。

そうすると、そのような男性的な可能性が、今までは心の奥に潜んでいたが、それがパーンと出てきたわけです。つまりそれは、女は女らしくしなさいという事を絶対的に信じている人があれば、その人からみれば悪です。たとえば、女というものはしとやかにして何を言われてもハイハイと言わねばならないともし思っている人がいたら、女の人が意見を言うだけで悪だと思うことでしょう。このごろはあまりそういう人はなくなりましたけれど。今でもおばあちゃんだったらそう思ってるかわかりません。「女のくせにそんな意見を言ったりして、もっと静かにしなさい」とか「女の人が足でふすまを開けるのではありません」とか言われるけれども、みんなはレディだからこのあたりはどうか……（笑い）それはその人の人生観です。ところが実際に、こういう指導原理はものすごく、今変わりつつあります。確かに女とは何かという問題は変わりつつありますけれども、この「ねむり姫」の時代であれば女性としての十二条というのは非常に明白だったわけです。ところが、そういっても女性の中に男性的な可能性がでてきます。「どうして私が男と同じように勉強していけないのだろう」とか、「なぜ私が自分の意見を言っていけないのだろう」とか、「私がどうして自分の人生を生きるために家を飛び出して悪いことがあろうか」これ、みんな悪くないのです。男がやる場合には。ところが「なぜ女ではいけないのか」とみんな思うはずです。

このように現在という時代は、すべての女性がこのアニムスの問題に対決しつつあるのではないかと私は思います。けれども、このアニムスの問題とほとんど対決しないで生きている女の人もいます。みんなそう思いませんか。みなさんの高校の同級生なんかにいるでしょう。ちゃんと就職してニコニコして、お花を習ったりお茶を習っている人いますね。けっこうしとやかで、お化粧をきれいにして、スイスイと結婚して子どもができて、みんないいことばかり。そういう段階を登っていく人は、このアニムスさんとおつきあいをやめた人です。何しろアニムスさんのおつきあいというのは大変な事になりますから。これ

はもう命取りです。だから、おつきあいをやめて生きている女性がいるわけです。ところが、みんなが大学へ来ていること自体、アニムスとのつき合いを始めていることを示しています。そして、十五歳ごろにこのようなことに気づき出す人も多いと思います。

いばら姫の眠り

ところで、十五歳でこの王女が眠りにつくとはどういうことでしょうか。しばらくの間女性性は眠りにつき、「いばら」で自分の城を守るということだと思います。つまり、適切な男性が現われるまで待つことになるわけです。これは本当にうまくできていると思います。ここで守られて眠りにつき、よいタイミングがきたときに、男性が来るまで待つのですから。ところで、非常に気の毒な人は、ここで、本当にやられてしまう人もあるわけです。

そんな人の例を、私はすぐ思い出します。われわれカウンセラーはそういう人たちに会うことが多いからです。たとえば、売春をしたり盗みをしたりして日本中をふらつき歩いているような若い女の人がありました。ところがその女性と話合ってみると、気の毒な経験があることがわかりました。すなわち、十二歳のときに病院に入院中のお母さんを夜中に見舞いに行こうとした。夜おそく一人で道を歩いていると、「自動車に乗せてあげよう」という男性が来ました。その女の子はその車に疑わずに乗ったために強姦されてしまいます。十二歳のときのことです。これは眠り姫が十五歳のときに、つむに刺されて眠るのとはずいぶん違う話ですね。こんな話をきくと、この人がこの後転落していくのも無理はないと思わされます。しかし、十二歳でこんなことがあるというのは、いかに両親の守りが薄かったかということにもなると思います。事実、この娘さんは、お父さんが酒を飲んで無茶苦茶言うので遅くなって、夜中に急に母親を見舞いにいく気になったのです。こんな悲しい気持ちになっている時は、悪い誘いに対しても無防備になっていることが多いものです。

ところで、眠り姫の場合は、両親が一生懸命に守ったが、ただひとつの盲点があり、そのために娘はつむに刺される。しかし考えてみると、このことのためにまた娘の精神の発達が生じるとも考えられます。つまり、守ることは必要だが、どこかで守りが薄いためにかえって発展が生じるというパラドックスが示されています。

ところで、ここでペローの話の方を見ますと面白いことが書

いてあります。つまり、ペローの方では、眠り姫がつむに刺されたとき、王様が例の親切な仙女に頼んで、すべてのものを姫と共に眠らせるようにし、その後で、王様とおきさき様は、眠ったままの王女にお別れのキスをして、お城から出て行かれましたと書いてあります。王女の百年後の幸福を祈りながら、王様とおきさき様は、去って行くのです。こんなところに、王の役割、あるいは両親の役割がよく表われているように思います。ある時点までは、両親は娘の守りであり得ますが、あるところからは、守りは「いばら」にまかせて、両親は立ち去っていく方がいいのです。グリムの方では、両親も共に眠ることになっていますが、私はペローの話の方が、この点うまくできているように思います。

ここで、守りとなったいばらについて考えてみますと、これは美しい花と痛いトゲを持っていることが特徴的ですね。これはゲーテの詩にもありますように、少女の美しさと守りのきびしさを示すものとして、真に適切なイメージを提供するものと思います。グリムの方の話によりますと、このいばらの城にはいろうとして多くの王子たちが挑戦し、なかにはいばらにとらえられて抜け出ることができず、いたましい最後をとげるものもあったそうです。確かに、ある「時」がくるまでは、このような娘には近よらない方が賢明なようです。近よれば、けがをさせられるばかりかもしれません。

何によらず「時」が来るまで待つということは大切なことです。これもわれわれカウンセラーは常に経験することです。一生懸命にいろいろなことをしても何も変わらなかったのに、時が来るとひとりで変わる人というのがあるのです。そんな時は、何かしようとして努力すると、いばらにひっかかれてけがをするだけで、ともかく何もせずに時のたつのを待つことが最良の方法なのです。

ところで、百年の時がたって、王女にふさわしい王子が城にはいっていくと、いばらも自然に道をひらいて、王子さまを通しました。その王子と王女が会う場面を、ペローの物語は見事に描いています。

「王女さまは目をさましました。そして、はじめてあったひととは考えられないようなやさしい目で王子さまをみつめながら、いいました。『あなたでしたの？　王子さま、ずいぶんお待ちいたしましたわ』……」

どうです素晴らしいでしょう。初対面の人に対して、全く確信をもってこんなことがいえるとは、『あなたでしたの王子さま、ずいぶんお待ちいたしましたわ』、こういう時の姫は、まるで前

前からこの王子と結婚することがわかっていたかのようないい方をしています。これは、百年の間眠っていた姫でこそ、こんなに確信をもっていえるのかもしれません。百年の眠りの間に、この乙女の心は一人の素晴らしい男性を受けいれる準備をしてきたのだと考えられます。それだけの準備と、それだけの長い間を待つ力のある人だけが、一目見た男性に対して確信をもって、「あなたでしたの……」と言えるのではないでしょうか。単なる人間の知恵を超えた判断が働くのだと思います。

それにしても、最後の結婚の結末は少しあっけない感じもします。やはり結婚に至るまでには、何かの課題をやり遂げることが必要な気もしますが、これはやはり、乙女の百年の眠りということに重点をおいたお話ですから、結婚のところは簡単になっているのでしょう。前にもいいましたが、おとぎ話には、それぞれ強調点があって、人間の心の動きのすべてをひとつの物語の中にいれこむことはむずかしいと思います。

もっとも、ペローの物語は結婚のところで終りにならず、二人はまだまだ苦労を重ねます。何しろ、この王子のお母さんが人食いだったというので大変なことになりますが、今日は、この続きの解釈は省略することにします。始めにいいましたように、おそらく、別の話が一緒にくっついてできたのではないかと思いますが……。

ところで、これで眠りの森の王女のお話も終りですが、ペローは、すべての物語に何らかの教訓を付けています。それをちょっと紹介しますと、

「お金持で、姿がよく、親切でやさしいおむこさんをもらうには、しばらく待つというのは、ごくあたりまえのことです。でも、百年も、眠ったきりで待つというのは――そんなに長い間静かに眠っているような娘は、いまではどこにもいないでしょう」とあります。

私は私なりにいろいろなことを話しましたが、皆さんはどんなことを考えましたか。それぞれで考えてみてください。

（おわり）

注

幼児の教育　六十九巻　五、六、七、八月号

「サンドプレイテクニック（箱庭療法）」

――秋山達子　参照